令和３年度

県大会発表者
作　品

宮城県知事賞　【全国大会奨励賞】

私と僕と、そして「自分」

大郷町立大郷中学校　３年　山内莉羅（やまうちりら）

「男性・女性、どちらかの性別に〇を付けてください」

そんな何気ないアンケートの質問に戸惑う自分がいました。すぐに〇をつけることはできませんでした。こういう質問に答えられない自分がそこにいたからです。なぜなら、自分の性別は男性でも女性でもないからです。

「お前って、男みたいだよな。」

同級生にそう言われたのは、小学五年生のとき。自分の性別に違和感を覚え始めた頃でした。それまで性別なんて意識しておらず、男性と女性しか知らなかったので、ずっと心に霧がかかったようにもやもやしていました。

「性同一性障害」…小学六年生の時に講演会で話された中に出てきた言葉です。驚いたのと同時に、それまでもやもやしていた自分の気持ちの意味が分かったような感覚でした。講演を聞いていく中で、自分も当てはまるのではないかと思い始めました。

しかし、言葉の意味は分かっても心自体は曇ったままでした。

中学生になり、制服を着ることになりました。男女の差がある制服、授業、そして名前の呼ばれ方…。男女で分かれる学校生活が嫌でたまらない自分に出会いました。女である自分が嫌で、鏡を見ると辛くて制服も着ることができず、登校できなくなりました。どうして自分の身長は伸びないのだろう、どうして声は低くならないのだろう。毎日毎日自分に問いかけては涙を流す日々が続きました。

冬の冷たい風が感じられるようになったある日のこと。「Xジェンダー男女以外の性のあり方」というサイトを見つけました。驚きました。そのサイトとの出会いは、性別は男と女の二つしか存在しないと思っていた自分の気持ちを大きく揺さぶるものとなったのです。女ではない自分は男だと思い込んでいたのが、このサイトによると、「Xジェンダー」すなわち、色々な性があることがわかりました。男女の中間である中性、男女のどちらもある両性、性別自体がない無性。そして、時と場合によって性別が変化する不定性があります。「不定性、ジェンダーフルイド…」そう言葉に出した時、悩んでいた自分の心が救われたような気分でした。心にかかっていた霧が晴れていく感じがしました。そのことを知ってから悩むことも少なくなり、日々変化していく自分の性別を楽しむことができるようになったのです。自分は心の性別によって一人称を変えることにしました。男よりの時には「僕」、女よりの時には「私」、どちらでもない時には「自分」。僕も私も自分も、どれも大切な自分の一部になりました。

そして、中学二年生になる頃、母と先生方の協力のおかげで制服もスカートからスラックスへ変えることができました。新しい自分に生まれ変わったような気分で、少しずつ登校できる日が増えていきました。

「制服変えたんだ、かっこいい！」

同級生に言われたその言葉に励まされました。「自分は自分のままでいい」、そう思えるようになりました。最初は自分を苦しめていた性別が、今では大切な自分の一部であり、アイデンティティです。

皆さんから見たら私はおかしいでしょうか。この性別は僕の思い込みでしょうか。そんなことはありません。自分はこの性別に誇りを持っています。自分の個性でもあります。きっとこの世の中、自分以外にも性別について、悩んでいる人がいると思います。

だから、自分は多くの人に伝えたい。性別を楽しんでいいこと、自分の性別は自分で決めていいこと、必要以上に悩まなくてもいいこと、そして決して一人ではないということを。なぜなら、自分の性別は自分のものなのだから。

●プロフィール●

好きなことやもの　読書、絵を描くこと

苦手なことやもの　思ったことを行動にうつすこと

将来の夢　・心療内科医
・人の話に耳を傾ける仕事

青少年のための宮城県民会議会長賞

コロナ禍で気づいた大切なこと

仙台市立幸町中学校　３年　鈴木心晴（すずきこはる）

皆さんは、多数決で何かを決める際、賛成が多そうな意見を選んで手を挙げたことはありませんか？また、意見を求められた時に、周りの空気を読んで、無難な回答をしたことはありませんか？

どちらも、これまでの私がよくしていたことです。出した答えが笑われないよう、周りから浮かないよう、とっさに自分の意見を抑えることもありました。もちろん、その時後ろめたさがない訳ではありません。それでも、つい、多数派になった時に得られる安心感や優越感の方を優先してきたのです。

しかし、今年の春、そんな私の考え方を揺るがすある出来事がありました。そのきっかけは祖母の一言でした。

「おばあちゃんね、パッチワークのサークルをしばらく休むことにしたの。」

裁縫が何よりも好きな祖母は、仲間と集まってバッグや小物を作る、週に一度のその時間を本当に楽しみにしていました。しかしこの春、新型コロナウイルスのワクチン接種が始まったのを受けて、今後はみんなで接種を済ませてから集まろうということになったそうです。祖母は、過去にアナフィラキシーショックを起こした経験があり、かかりつけ医と相談して、接種を控えると決めた矢先のことでした。

「もちろん、周りが不安な気持ちも分かるから、仕方ないね。」

祖母は、私にあっさりとそう言ったように見えました。しかし後で母から聞いたところ、ワクチンを受けない選択をしたことを周りに話した途端、なぜ受けないのかと責められ、一斉に冷たくされて、そこから関係がギクシャクしてしまい、自ら身を引かざるを得なかったことが分かりました。

以前から、私達の社会には、多数派こそが正義で、そこから外れることはあたかも悪かのような価値観があったように思います。特に、新型コロナウイルスの流行が始まってからは、それらの風潮が「〇〇警察」と名付けられ、厳しさを増すばかりです。

例えば、感染者の名前や自宅を特定し、その勤務先や学校へも誹謗中傷をする「コロナ警察」。さらに、自粛の要請に応じない個人や店などに対し、一方的に警告や嫌がらせを行う「自粛警察」も現れ、とうとう「ワクチン警察」という言葉まで聞かれ始めました。

私自身も、感染者に対し、いったどんな行動をしていたのだ、周りに迷惑をかけないで、という思いを抱くことがありました。ワクチンだって、自分と社会のために打つのが当たり前で正しいと思っていました。振り返ると、その「警察」の立場で物事を見ていることが多かったように感じます。

しかし、その行動が過激さを増すにつれて、多数派の立場を利用したそれらの「警察」がしていることは、必ずしも正しいことではないと気が付いたのです。祖母のことがきっかけで、私は初めてもう一方の立場を身近に感じ、自分の浅はかさを見直すことができました。人々に不安が募るコロナ禍においては、どうしても同調圧力が高まりがちです。しかし、そのような今だからこそ、一度立ち止まって、冷静に、もう一方の相手に思いを馳せる努力が必要だと思うようになりました。どんなに少数だとしても、その人の考えや判断は尊重されなければなりません。まして、その人自身を否定するようなことがあってはならないと思います。そこには、様々な理由ややむを得ない事情があるはずです。何より、その人が一番孤独で、不安を抱えているかもしれないのです。

私達には今後も、学校や地域の中で、意見を出し合う多くの機会があるでしょう。多様性が認められるべきこの社会に、数や雰囲気で決めることのできる正義感や優劣はありません。これからは、自分が多数派かどうかにこだわるのではなく、互いの意見に耳を傾ける優しさを忘れずにいたいと思います。もし自分と相手との間に、多数と少数、つまり有利と不利の関係があると気づいた時には、なおさら丁寧に対話やコミュニケーションを重ね、関係性を築いていくことを心がけようと思います。

私には、どんな場面でも恐れず自信をもって、自分の言葉で考えを伝えるという今後の大きな目標もできました。

互いを認める姿勢が広がって、いつか誰もが当たり前に大切にされる、そんな日が来ることを信じています。

●プロフィール●

好きなことやもの	私は読書とチアダンスが好きです。読書は、本を開くだけで自分の知らない世界が経験できること、チアダンスはチームで友人と一緒に様々な表現を楽しめることが魅力だと思います。どちらも時間を忘れて没頭してしまいます。
苦手なことやもの	ダンスを除く運動全般が好きですが得意ではありません。いつか突然得意になる日が来ることを切望しています。
将来の夢	新聞で読んだある看護師さんの姿にあこがれて、どんな時でも患者さんの気持ちに寄り添える看護師になりたいと思うようになりました。最近では、赤ちゃんの出産のサポート、命の誕生を支える助産師にも関心があります。

青少年のための宮城県民会議会長賞

人と音楽の力、未来へ向かって

南三陸町立志津川中学校　3年　佐藤聖奈（さとうせな）

2011年３月11日。あの日のことを今でも鮮明に覚えている。当時四歳の私は祖父母と一緒に沿岸部にある自宅にいた。大きな揺れが続く中、家の外を見ると高く黒い津波が迫っていた。急いで二階に上がり、私たちは手と手を強く握りしめたが、津波は間もなく私たちを飲み込んだ。祖父母とともに、三人で九死に一生を得たが、津波に飲まれる中で祖父が言った「諦めるな！三人で生きて帰る！」という言葉は今でも耳から離れない。

津波が引いてからは自力で家から脱出し、高台にいた人に助けられ、家族とも再会することができた。しかし、自宅は流されてしまったため、近くにある高校と高台にある母の実家を行き来しつつの避難生活が始まった。自宅での生活とは違い、不自由に思うことも多くあったが、家族と肩を寄せ合いながらなんとか生活していた。そんな私たちの生活を支え、励まそうと、県外からも様々な人がやって来た。その中でも印象に残っているのは、自衛隊沖縄部隊の方々だ。彼らは高校にある避難所に拠点を置き、町の復旧作業にあたっていたが、あるとき避難所で演奏会を開いてくれた。自衛隊の方々は弦が三本張ってある不思議な楽器を奏でていた。三線という楽器らしい。奏でられる軽快なリズムと温かい音色。私は一気に演奏に引き込まれた。演奏に真剣に聞き入り、その姿を目に焼き付けた。ふと周りを見ると、大人たちは涙を流していた。私も周りの大人たちも津波によって跡形もなくなった町を目の当たりにし、心が冷え切っていた。しかし、三線の音色を聞くうちに、勇気と希望が湧き上がってくるのを感じた。私にもできることがあるかもしれない。すっかり三線の音色に魅了された私は、自衛隊の方々に三線の演奏や沖縄の歌を習った。そして、「サンシンズジュニア」という地元の高校生から小学校入学前の子供たちまで、幅広い年齢が所属する音楽グループを結成した。私も演奏で人々に勇気や希望を届けたい。その一心で練習に励んだ。震災から一年半が経過した2012年８月には那覇に行き、あの時お世話になった自衛隊沖縄部隊の方々への感謝の気持ちを込めて演奏を行った。また、震災直後にたくさんの支援をいただいた埼玉県の団体のところへ行き、演奏を行うこともあった。今年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、埼玉県へ直接行くことはかなわなかったが、三月には演奏した動画を届けた。今の私たちの姿を通して、勇気を少しでも与えられたらうれしいと思っている。

震災から十年が経った。皆さんにとって、震災からの十年はどのようなものだったろうか。私にとってのこの十年は、人と人とのつながりの大切さと、音楽の持つ大きな力を感じさせるものであったと考える。全てを失い、絶望の淵に立たされた十年前。全国からの支援がなければ生きていけなかった。そんな中で、人と人とがつながり、手と手を取り合って再び立ち上がった姿は絶対に忘れてはならない。そして、音楽は人々の心を開き、心と心をつなぎ、勇気や希望を与える。これらのことは、私がこれからも語り継いでいかなくてはならないと考える。

現在、日本は新型コロナウイルス感染症という未知の脅威と戦っている。我慢が強いられ、終わりの見えない不安な日々を過ごしている。私は多少の違いはあるが、被災した当時と似たような状況であると感じている。しかし、人々の様子を見ると、医療従事者の方々や感染者に対する差別が起こっている。私はこのような状況を悲しく思うとともに、この困難を乗り越えるには人々が手と手を取り合い、協力して立ち向かうことが必要だと考える。

私は、これからも三線を続けるつもりだ。三線の軽快なリズムと温かい音色が人々の心をつなぎ、勇気や希望を届けると信じて。

●プロフィール●

好きなことやもの	私の好きなことは、音楽を聴くことです。悲しいとき、辛いとき、音楽を聴くと、自然に気持ちが楽になりポジティブに考えられます。最近は「re：もう一度」という曲を聴いています。
苦手なことやもの	私の苦手なものは１つあります。それは、ネズミです。私は動物が大好きですが、ネズミだけはなぜか苦手です。
将来の夢	私の将来の夢は、沢山あります。ネイリスト、看護師、警察官、幼稚園の先生、いっぱいあります。でも人とつながっている。人の役に立つ仕事に就きたいと思っています。

優　良　賞

私の弟

仙台市立八軒中学校　3年　久保田（くぼた）　菜々子（ななこ）

私の弟は発達障害です。今は小学校の支援学級に通っています。

弟は小さかったとき、こだわりが強く、弟なりのルーティーンがあり、家族全員がそれに合わせた生活をしていました。少しでもルーティーン通りにいかないと、１時間近く泣いたり、騒いだりしていました。

私は弟にハンディキャップがあると特に意識したことはありません。外で泣いて騒がれると、人に見られて恥ずかしい思いもしましたが、それには理由がありました。いつも通りにいかないと、不安になったり、気になってしまうからです。私には何ともない事が、弟には嫌に感じてしまうのです。

弟が小学２年生、私が小学６年生になった春のことです。私は同学年の女子数人に質問をされました。

「支援学級の久保田さんて、菜々子さんの弟？」

私が「そうだよ」と答えると、彼女たちはくすくすと笑い、その次の瞬間、私に向かって、

「障がい者の姉！」と言い放ちました。

私は、何も言えませんでした。とても悔しくて、でも何も言えず、ただ怒りと悲しみで頭が真っ白になっていくのを感じました。

その日から、その女子達には「弟が障がい者なら、姉も馬鹿なんじゃない」「ちゃんと勉強しなよ」などといった悪口を言われるようになりました。

そんな悪口を聞く度、弟の存在全てが否定されているように感じました。彼女達は弟の何を知っているというのでしょうか。弟のことだけでなく、障がい者に対する心ない悪口を友達から聞くこともありました。

そんな風に障がい者を差別する人に聞いてみたい。なぜ障がい者というだけで、馬鹿にしたり、笑ったり、差別したりするのでしょうか。

世界中で、国籍や性別、障がいの有無に関係なく、それぞれの人達がお互いの個性を尊重して暮らしていくことの大切さが、繰り返し叫ばれています。その一方で、個性が大切だと言いながら、自分とは違った人を見るとその人の考えを否定し、個性を受け入れず、下に扱う。その人の家族までも下に見て差別する。そんな人達を見る度、お互いを大切にする世界なんて本当に実現するのか疑問でした。

ある日、昇降口の前でもじもじしている弟を見つけました。騒がしい校庭とは対照的な薄暗い昇降口に一人でいる弟。私がおもわず声をかけようとしたそのとき、一緒にいた私の友達が「一緒に遊ぼうよ！」と弟を誘ってくれました。その子は弟に明るく接してくれました。弟も次第に打ち解け、笑って遊んでいました。

後日、その子にお礼を言うと、「一人ぼっちで寂しそうにしている子が『違い』を持っているからって声をかけないのは間違いなんじゃないの？世の中には赤が好きな人もいれば、青が好きな人もいる。『違い』ってそういうことなんじゃない。」

と言われ、心の霧がすーっと晴れた気持ちになりました。彼女の言葉に感動と勇気をもらうことができました。

その友達のように、障がいを「違い」と認めてくれる人を増やすことは簡単ではありません。全員が理解してくれるにはとても長い年月がかかるでしょう。

東京オリンピックの開催に当たって、担当者による差別的な発言や過去のいじめが問題になり、辞任したり解任されたりしました。差別やいじめは結局誰も幸せにすることはないはずです。

相手の考えていること、感じていることを理解することは難しいことですが、私は理解しようとする努力はし続けたいです。いつかみんなが「みんな違ってみんないい」と当たり前に言える日が来ることを信じて。

●プロフィール●

好きなことやもの　読書、楽器を吹くこと、弾くこと。

苦手なことやもの　ずっと同じことをすること。

将来の夢　薬剤師。

優　良　賞

何者にだってなれる

山元町立山元中学校　３年　藤川瑞己（ふじかわ みづき）

私の通っている山元中学校には、三種類の制服を着た生徒がいます。私が着ているのは旧坂元中の制服。新しい友達は旧山下中の制服。１年生は山元中の制服。山元中は今年４月、町内の山下中と坂元中が再編され、新しく開校された学校です。ですから、２・３年生は今までの制服、１年生は新しく制定された山元中の制服を着ています。

３年生の私は、３月まで坂元中に通っていました。全校生徒52名と小規模校でしたが、だからこそ、学年関係なくとても仲が良く、絶大な団結力がありました。行事では生徒数の少なさを補うぐらい、全員が全力で協力し合いました。また、クラス替えもなく、坂元小から８年間同じメンバーです。気を遣うこともなく、自分の居場所が決まって必ず「そこ」にはありました。

今年の３月末、閉校の実感が湧きませんでしたが、最後の部活動の日、顧問の先生が、部活を早めに切り上げて、「最後に校舎を散歩して来い。」と時間を作って下さったのです。思い出の詰まった校舎を友達と歩きました。荷物が出されてガランとしている校舎。

「ここで昼休みおしゃべりしたよね。楽しかったよね。」

でも私達がこの場所に来ることはもうない。寂しい気持ちが込み上げて来て、心の奥底の正直な思いが口から出ました。

「本当はここ、坂元中学校で卒業したかった。」

坂元中は私の中でとても重要で、私の一部になっていたのです。

４月、旧山下中の校舎で、山元中が開校しました。新しい生活。私は楽しさを実感しました。初めてのクラス替え、33人中坂中生は８人。山下中の方が３倍人数が多く、明るくてテンションが高いように感じました。頭脳明晰な人、運動神経抜群の人、すごく面白い人、坂元中では味わったことのない刺激が毎日たくさんあります。その魅力に惹かれ、慣れようと夢中で努力した気がします。

しかし、そんな時期が一段落し、ふと不安がよぎったのです。坂中生だった自分、山元中の生徒になった自分。自分は一体今、何者になろうとしているのだろうかと。

坂中生だった時には、考えなくても毎日自分の居場所が、決まってそこにありました。今は居場所を作るのに必死で努力をしている自分がいます。何か落ち着かず、自分とは何だろうと考え、不安が湧いて来ました。

そんな時、母の友人が言ってくれたのです。「中学生かぁ。その歳なら努力さえすれば何にでもなれるよ。」と。

私はその一言で気持ちがパッと明るくなりました。そうか、私は今は何者にもなれていないけれど、今から何にでもなれるんだ。心が軽くなりやる気が湧いて出て来ました。

山元中には私などより勉強や運動ができる人がたくさんいます。そんな新しい刺激に怯えるのではなく、切磋琢磨しながら、自分のプラスに、力にすればいいんだ。今既に私に手を差し伸べてくれる新しい仲間がいる。坂元中の友達も互いに変化しながら見守ってくれている。この新しい環境の中で、私は何者かになって行くチャンスをしっかりとつかみ取って行きたいと思います。

人は一人では成長できません。何かしらの刺激がなければ、大きく考え方は変わりません。刺激を恐れ逃げたくなる事も時にはあると思います。でも、この新しい山元中で刺激をもらえるチャンスを、このチャンスを生かし、私は強くなりたいと、今思います。

なんて言ったって、まだ未完成な中学生の私達は、努力さえすれば何者にだってなれるのですから。

●プロフィール●

好きなことやもの	読書をすることです。小説は伊坂幸太郎先生の本が特に好きです。また、声優さんが好きで、なかでも櫻井孝宏さんが好きです。
苦手なことやもの	豆が特に苦手です。豆全般が食べられません。その中でも、納豆は本当に苦手で、絶対に食べれません。
将来の夢	本の編集者になりたいです。本がとても好きなので、自分の好きなことを仕事にしたいと思っています。

優　良　賞

夢、目標、実現

石巻市立万石浦中学校　３年　宮林咲希（みやばやしさき）

「なんのために吹いているんだろう。」

結果も出せず、部活も思い切りできない日々の中で、私は深い霧の中にいるような気持ちでした。

私が初めてフルートを吹いたのは、６年前。小学校３年生だった私は、「楽しそう」という思いから音楽部に入部しました。入部してからの３年間、コンクールでは、毎年県大会に進むことができ、私の心には、「東北大会出場」という大きな夢ができました。しかし、部長として迎えた小学校最後のコンクール、結果は、県大会にすら進むことができませんでした。大きなショックを受けた私は、東北大会という言葉を、心の奥底にしまうしかありませんでした。

中学校に入学し、迷わず吹奏楽部に入部しました。そこには、毎日本気で練習に取り組む先輩方や先生の姿がありました。厳しい練習も日を重ねるごとに楽しくなり、私の心には、また「東北大会」という夢が鮮やかに戻ってきました。そんな先輩方と迎えた夏のコンクール本番。地区大会を１位で通過し、全員が、東北大会に進むことを信じていました。しかし、結果は、県大会止まり。

「やっぱり私には無理なんだ。」

あれだけ練習していた先輩方でも叶えられなかった夢は、またしても、暗闇に消えてしまいそうになりました。さらに追い打ちをかけたのは、新型コロナウイルスの影響でした。２年生の夏のコンクールは中止となり、活動が大きく制限される中で、私は、夢も希望も失いかけていました。

そんな私を救ってくれたのは、顧問の先生と仲間たちでした。冬のアンサンブルコンテストの開催が決まり、私はリーダーを務めることになりました。チームが集まると、自然に「東北大会」という言葉が出てきました。今までは、夢のままで終わっていた東北大会という目標。この仲間たちと絶対に叶えたいと思い、毎日全員で「東北大会にいこう」と口に出すようになりました。練習は、１日８時間近くになることもありました。厳しい指導をうけるたびに、「やっぱり自分には無理かもしれない。」という感情が襲ってきましたが、いつのまにか、東北大会という目標以上に、「この仲間たちとずっと吹いていたい」という思いが強くなり、どんな厳しい練習も乗り越えることができました。そして迎えた県大会本番、プレッシャーよりも楽しさのほうが大きかったことを今でも覚えています。演奏している時間は、私にとって何よりも幸せな時間でした。そして結果発表、全員が一つの画面に集中し、その瞬間を待ちました。「東北大会」私たちの欄に出場決定の丸がついていました。私は生まれて初めてうれし涙を流しました。遠い夢だった東北大会が、確かな目標となり、ついに実現したのです。

この６年間が私に教えてくれたのは、夢は見るものではなく、何度も何度も口に出し、実現するまで努力することで叶えられるものなんだということです。ただ、それは一人でできることではありませんでした。支えてくれた仲間や先生、家族への感謝の気持ちは忘れてはなりません。感謝の気持ちは、また新たな一歩を踏み出す勇気を与えてくれます。

今、日本では新型コロナウイルスの感染が再拡大し、様々な活動が制限され、先の見えない暗闇の中にいるようです。しかし、明けない夜はないように、きっといつか明るい未来が訪れるはずです。最初に吹いた曲は、ノクターンといって、夜明けを待つ曲です。どんなに苦しい今があっても、あきらめず進み続けることが明日の自分をつくります。

私の次の目標は、全国大会でフルートを吹くことです。自分のためにも、今まで支えてくれた人たちのためにも、私は前に進み続けます。

●プロフィール●

好きなことやもの	私が好きなものは音楽です。自分がフルートを演奏するのはもちろん、色々な団体の吹奏楽やクラシックを聴くことも大好きです。高校野球の吹部応援など、人にエールをおくる音楽も大好きです。
苦手なことやもの	私は運動をすることがとても苦手です。体を動かすことは好きですが、思ったように走ったり、投げたり、とんだりできません。私は高校野球やプロ野球の観戦が大好きなので、選手を応援するかたちで楽しんでいきたいです。
将来の夢	私の将来の夢は、中学校の先生になり、吹奏楽部の顧問になることです。私が中学校に入学した時の吹奏楽部の顧問のおかげで東北大会に進むことができ、いつも親身になって接してくださいました。私もその先生のようになって好きなことを生かしていきたいです。

優　良　賞

共に生きる未来へ

仙台市立中田中学校　3年　若木千鶴（わかき ちづる）

「お米の研ぎ汁が水に住む生き物の悪影響になる。」このことを知ったとき、私ははっと息を呑んだことを覚えています。

我が家には、ある習慣があります。それはお米の研ぎ汁をシンクに流さず、庭の植物にやるというものです。幼い頃からあるこの習慣に、どんな意味があるのか、私は考えたこともありませんでした。そんな私に、祖母がその意味を語ってくれました。「お米を研いだときに出るヌカは、海や川を汚すと昔から言われている。汚れた水では、生き物が生きづらくなってしまうんだ。」と。主食であるお米は毎日研ぐため、少しでも環境を守れるようにと思い始めたと、祖母は言います。実際、お米の研ぎ汁500ミリリットルを生き物が住める水質に戻すには、バスタブ４杯分、約400リットルもの水が必要になると言います。シンクに流す研ぎ汁は、実際には下水処理をされ、直接海に流れることはありません。しかし、これを聞いたとき、私は、私たち家族がしてきたことが間違いではなかったと、少し安堵しました。そして、それ以上に、お米の研ぎ汁でさえも、環境や生き物に悪影響になるのだと、恐怖にも似た感情を覚えたのです。

「絶滅危惧種。」私がお米の研ぎ汁のことを意識するようになったのは、この言葉を耳にする機会が増えたからです。皆さんは絶滅危惧種と聞いて、どんな生き物を思い浮かべるでしょう。パンダやゴリラは有名ですが、これらが住む場所は、私たちが暮らす日本からは遠く離れ、自分の身近な問題と捉える人は少ないかもしれません。しかし、実は今、生き物の絶滅は、遠い世界の話ではなく、私たちの家の軒先や校庭、街の中でも起きているのです。

例えば身近に飛び回るハチもそうです。花の受粉を助けるハチは、野菜や果物を栽培する農業で、大切な役割を担っています。そのため、ハチがいなくなれば、農業が苦しくなり、栄養価の高い物が食べられなくなってしまいます。ハチがいなくなるだけで、世界の農地の35パーセントの収穫量が低下し、主要な農作物の87品種が影響を受けるという調査結果もあります。そのハチを追い詰めている原因は、土地開発、地球温暖化、外来生物の侵入など、人類の行動によるものです。

さらに、日本の食卓ではお馴染みのマグロも、巻き網漁や水質汚染、気候変動などが原因で、個体数が急激に減少しています。マグロもまた、私たち人類の豊かな生活のための犠牲になっているのです。

絶滅の原因の多くは、私たち人類が自然界に何らかの手を加えたことが発端となっています。私たちは知らず知らずのうちに、生き物が生きる環境を壊し、絶滅へと追い詰めています。それは同時に、私たちの生活をも、追い詰めていると私は考えます。なぜなら、私たちの豊かな暮らしは、多くの生き物がバランスを取り合って生きる上に成り立っているからです。生態系のバランスを保つことは私たちの未来を守ることに繋がるのです。

中学生である私たちにもできることはあります。それは、小さなことを習慣にすること。対策はとてもシンプルです。調理くずや食べ残しは回収すること。食器や鍋の油は紙や布で拭き取ること。ゴミの分別も大切です。そして何より、「身近な生き物にも絶滅の危機が訪れていること」を知ることが重要です。

この危機から目をそらさず、しっかりと理解し、どんな些細なことでも環境や生き物のことを考えて生活することが、今の私たちには必要です。そう、校庭にやってきた一匹のハチを守るために。ハチもマグロも人類も、地球で暮らす、すべての生き物の未来を守るために。

●プロフィール●

好きなことやもの	ミュージカル、劇団四季、おどること、ディズニー、歌うこと、動物、音楽の授業。
苦手なことやもの	キノコ、社会と数学のテスト、長距離走。
将来の夢	劇団四季の女優さん、海外へ留学すること。

優　良　賞

心の傷

仙台市立台原中学校　3年　淀野愛琳（よどの　あいり）

年間約80万人。皆さんはこれがなんの数字かわかりますか。これは世界の一年間の自殺者数です。割合にすると40秒に一人が、世界のどこかで自殺をしています。そして、この日本だけでも、毎年約２万人の方が自ら命を絶っています。

2020年５月11日午前４時35分頃歌舞伎町でビルから飛び降りた男女２名がいました。ある日、スマホで、一つの動画を見つけました。それは男女２人組がおそろいの服を着て踊っている動画でした。その動画の概要欄には、「数時間後に死ぬカップル＃歌舞伎」と書かれていました。さらに、その動画のコメント欄を開いてみると「これガチじゃん。」「この二人ホントに死んでるよ。」「歌舞伎町　飛び降りで検索したら出てくる。」とたくさんのコメントが書かれていました。その二人は18歳の男子専門学校生と14歳の女子中学生で、交際をして数時間後に自殺したことを知りました。14歳。自分よりも年下である人物が自殺したと知り、私は悲しさとも苦しさとも違うなんとも言えない気持ちになりました。

この件をきっかけに私は「自殺」について調べてみることにしました。調べていくうちにＮＨＫの『自殺と向き合う』というサイトを見つけました。このサイトにはたくさんの人のメッセージが掲載されていました。「自分が嫌い。消えたい。死にたい」。「もう疲れた。はやく死にたい。生まれてきた環境も自分の見た目も中身も全部ダメだった。努力するくらいならもう全部終わりにしてしまいたい」。「私がいなくなればきっとみんな幸せになれる」。10代の学生、20代の就活中の大学生、30代の主婦、40代のサラリーマン。老若男女こんなにも多くの人たちが今この瞬間にも自分の命を絶ってしまいたいと考えていることを初めて知りました。

現代社会において、日本では様々な課題が生まれています。核家族化、少子高齢化、介護福祉。コロナ禍による失業や雇用率の低下それらの社会的要因から人とのコミュニケーションが減り、「自分はダメな人間。必要のない人間」だという自信の喪失や孤独感を抱える人が増えてきています。私の周りにはそういうことを考えている人が少ないと感じていましたが、それはきっと違います。自分が周りの人の苦しさに気付けていないだけなのだと思いました。私は自分自身がなんの疑問ももたずに幸せに生活していることに気付かされました。周りには当たり前に食卓を囲む家族。学校に行けば、笑顔の友達。仲間と切磋琢磨し、技術を磨き上げる部活動。しかし、その当たり前の笑顔の裏には、それぞれがなにか苦悩を抱えているのではないか。心の傷を隠しもっているのではないか。

私は単刀直入に友達に自殺したいと思った事があるか聞いてみました。返ってきたのは「あるよ。毎日自己嫌悪で死にたくなる。」という言葉でした。私たちと一緒にいたときの笑顔の瞬間も、心の中では「死にたい」という悲しい願望を抱えていたかもしれないと考えたら涙がとまりませんでした。私はその友達が見えない「心の傷」を抱えていることに全く気づけませんでした。実際に起きてしまった自殺ももし誰にも言えない「心の傷」に気付き救ってくれる人がいたならば、別の結果になっていたかもしれません。

当たり前のことですが、命は一つであり、失ってしまった命が還ってくることはありません。現代は社会的な問題が多くあり、一人一人が、人に言えない「心の傷」を抱えています。でも、人は一人ではないこと、必要としてくれる人、助けてくれる人が必ずいることを忘れないでほしいです。ささいな変化に気付き、そばにいてくれる優しさをもつ人が一人でも増えれば少しずつでも自らの命を絶つ人は減っていくと思います。だからこそ私は、まずは自分の周りの人たちの「心の傷」に気付ける人間になりたい、心に寄り添える人間になりたい。そう思っています。そして「心の傷」に気づける人間が一人でも多くなってほしいと切に願います。

●プロフィール●

好きなことやもの	チューバ、お菓子作り、アイドル、絶叫系のアトラクション、ゲーム、マンガ、アニメ、バレー、脚、花柄のワンピース、チェック柄、ピンク、恋バナ、数学の計算問題、しゃべること、アイスクリーム、歯医者、オムライス、温泉にはいること、青空。
苦手なことやもの	虫、野菜、社会、球技、麦茶以外のお茶、湿気、雨、雪、凍った道路、テレビをずっと集中して見ること、辛いもの、苦いもの、地道な作業、じっとしていること、グレープフルーツ、部屋の片付け、暗記、２つ以上同時に物事を進めること。
将来の夢	死ぬときに「自分に生まれてきて良かった、この人生で良かった」と思える人生を歩むこと。

優　良　賞

誰もそんなの決めてない

富谷市立東向陽台中学校　3年　金川仁南（かながわ　に　な）

Nice to meet you, I want be your friend !

金色の髪で色白の女の子に私は知らない言語で声をかけられた。

彼女の青い瞳を見つめながら自分と容姿も違えば話し方も違う事に驚き、どうすれば良いのか分からず怖いと感じてしまいました。そっと立ち去る私を不思議そうに見ていた女の子の悲しげな目を今でもよく覚えています。なんか違う、普通とは違っていると言わんばかりに、無知な私は怪訝な顔でその子を見ていたのだと思います。知らない土地で不安ながらも友達を作ろうとして声をかけてくれたに違いありません。その子の目に私はどう映ったのだろう。悲しい１ページとなり、悔やんでも悔やみきれない行動となってお互いの心に刻まれてしまいました。

私達は何気なく自分の基準や価値観で人に接してしまう事は無いでしょうか。

自分自身もある出来事から「普通」と言う言葉に悩まされた一人です。私は体調を崩して給食を食べずに残してしまった事がありました。「普通の人なら食べられるのにどうして一口も食べないの？」と聞かれ、次々に投げかけられた言葉を「自分は普通ではない」と捉えてしまいました。その日以来私は食べ物が喉を通らなくなり飲み込み方すら思い出せなくなりました。あの感覚は一生忘れられません。「食べるなんて人ならば普通に出来る事だよ」日々の悪気の無い言葉が私を追い詰めていきました。同じ食事が出来無くなり代わりのものを家庭から持参していた時期もありました。皆のようにお皿の底が見えるくらい綺麗に食べたいと願っているのは私自身。でも体は正直でそれらの言葉の数々がしっかりと刻まれて傷跡となりすっかり食べる事が苦手となりました。

普通って一体何だろう。ふと女の子との出来事が浮かびました。周りの人と違うから普通じゃない。そんな悲しい考え方をあの瞳も感じたのでしょう。私は身をもって理解しました。

自分の中の普通だけが基準では無く、様々な捉え方があって人それぞれの普通が存在すると悟りました。私が言われ続けた言葉や彼女にしてしまった態度は悪気が無いにしても心へ与えるダメージは大きいものでした。価値観の押し付けが誰かの心を閉ざしてしまう事も確かです。

人の数だけ普通は存在する。まず知るところから始めよう。あの日傷つけてしまった女の子を知ろうとした私は、一緒に英語で描かれた絵本を読みました。Do you like English ? 嬉しそうに来る日も来る日も絵本を抱えて駆け寄って来てくれた彼女。言葉が分からなくても一冊の本に顔を寄せ合い楽しい時間を過ごすことが出来ました。彼女のお陰で英語にも興味を持ち、世界が広がるのがたまらなく嬉しかったです。そんな彼女は今でも大切な友達です。

今なら、自分の中の当たり前から抜け出し、視野を広げる勇気は大事な事だと心から言えます。人々の持つ普通は全て個性です。どれが正しくてどれが正しくないなんて誰にも決められません。その時点で多数派にいる自分がさも普通だと安堵し、それに属せない者は普通ではないと一蹴する。それは本当に「普通」なのでしょうか。

いや、誰もそんなの決めてない。

もっと相手を思いやり、受け止め、視野を広げ、個性を認め合い、互いを尊重しあえる事が全ての始まりになるはずです。互いを知るところから始めよう。あの日のあの子のように。

I want be your friend !

●プロフィール●

好きなことやもの	音楽が好きです。マーチングバンドに所属していてトランペットを奏でたり、みんなで一丸となりマーチングショーを作ることがとても楽しいです。
苦手なことやもの	自転車にのること。
将来の夢	法律関係の仕事に就いて、人のために役立つ仕事をしたいです。

優　良　賞

挑戦－新しい自分と出会うため

白石市立東中学校　３年　白石朱那（しらいしあやな）

「キャプテンとかどう？」

ある日、母が私に投げかけた何気ない一言でした。実はこの言葉こそが、私の性格を変える大きなきっかけとなったのです。

私は小学３年生から、スポーツ少年団でドッジボールをやっていました。きっかけは、母の勧めです。あまりにも内気な私を見かねての事だったに違いありません。

当時の私は極度の人見知り、常に母の後に隠れているような子供でした。「人と話すことが苦手」「笑顔のない表情」「常に蚊の鳴くような小さな声」自信のひとかけらもない子供だったのです。「自分はずっとこのままなのかな」という不安ばかりが常に心に宿っていました。

しかしドッジボールをやるようになってから自分の中の変化に気づくようになりました。今まで自分の耳でも聞いたことのない、発したことのない声が、自分の口から出るようになったのです。「ナイス」「ハイ！１・２・３！」そこには、自然に笑顔になる私がいました。前のように暗くて小さな声の私はどこにも存在しませんでした。その上、大きな声を出すことが心地よくなっていったのです。学校の友達からも「明るくなったね」「声が大きくなったね」と声をかけてもらうことが多くなりました。

６年生になった時のことです。キャプテンを決める時がやってきました。自分の中で変化があっても、人前で話したことのない私です。「リーダーなんて無縁なこと」「関係のないこと」と思っていました。

しかし、母から言われた「キャプテンとかどう？」という言葉に対して、前の私なら、「そんなの無理だよ」と即答していたに違いありません。しかし、この時は心のどこかで「やってみたい！」という気持ちが芽生えていたのかもしれません。すぐに断らない私の姿に母は驚きを隠せない様子でしたが、それ以上に自分が自分にびっくりしました。心のどこかでずっと待っていた言葉だったのかもしれません。

監督が一人ひとりと面接をし、それぞれの思いを受け、ついにキャプテンが発表されました。

「今年度のキャプテンは・・・あやなにやってもらいます」

あやなの「あ」が聞こえた瞬間、「私だ！」と分かり心が震えました。頬が内側から押されるように緩んだ瞬間でした。この時のうれしさは経験したことのないものでした。

ただ、キャプテンになれば、悩むことも多くなります。特に私はその経験がないのですからなおさらです。試合が近づくとメンバーの意見の食い違いや勝手な行動が予想した通りやってきました。「やはり私には無理だった」そんな時、母が「一人一人、性格や考え方も違う。だからお母さんはあやなの考えは間違いではないと思うよ」「黙っているだけでは伝わらないからとりあえず言葉を発してみよう」悩む度に励ましてくれたのです。その度に、「頑張ろう！」と思いました。

仕事が忙しい時には、交換日記風にノートに書き込み私の悩みに答えてくれました。その言葉はタイミング良く私の心に沁みてきました。おかげで何とか一年間キャプテンをやり遂げることができました。そしてそれは大きな自信となり今に至ります。

今、私は中学３年生。一つ目の壁が受験ですが、長い人生、多くの壁が私を待っているに違いありません。しかしどんな高さの壁であろうと挑戦することで新しい自分と出会えると信じています。そして、どんなことも母の言葉とドッジボールの経験を思い出せば乗り越えられそうな気がします。初めて大きな声を出せたこの言葉も忘れません。

「ナイス！」「ハイ！１・２・３」

●プロフィール●

好きなことやもの	オーディション番組やアニメを見ることが好きです。ただ、おもしろいだけでなく、人間性や新しい言葉が学べるからです。努力している人を見ていると頑張ろうという気持ちになります。
苦手なことやもの	友達をつくることが苦手です。人見知りなので声をかけることができません。一言、声をかけてみるけど、焦ってしまい、ひきつった笑顔になってしまいます。
将来の夢	薬剤師になりたいです。祖母から勧められたことがきっかけでなりたいなと思いました。夢が実現するまでは、まだまだ時間はありますが、努力を怠らず頑張りたいと思います。

優　良　賞

私にできること

仙台市立根白石中学校　3年　庄司（しょうじ）　菜々花（ななか）

「また言ってしまった……。」いつも冷たい態度や、素っ気ない返事をした後に自分が嫌になるのです。

私にはアルツハイマー型認知症の曾祖母ぴいちゃんがいます。小さい頃に手をつないで一緒に歩いたり、旅行をした記憶はありますが、物心ついたころには、「あんた誰や？」とか、同じことを何度も聞かれることが嫌になり、わざと聞こえないふりをしたり、冷たい対応をしてしまうことがありました。私はぴいちゃんの病について、母から聞かされ理解しているつもりでしたが、実際ぴいちゃんを目の前にすると、着替えがうまく出来ずにボタンがずれていたり、猛暑の中長袖で生活している姿に、呆れて笑ってしまう自分がいました。

でも一緒に暮らしている祖母や母は違います。いつもぴいちゃんの気もちに寄り添い、何度交わした会話でも、表情一つ変えずに優しく聞いているのです。何か行動するときも全て手助けをするのではなく、自分でできることは、自分でやれるようサポートしています。母は介護の仕事をしていたので、きっと仕事と同じだからできるのだろうと、初めは軽く考えていました。昨年の３月、今までぴいちゃんの面倒をみていた祖母が足の病気で入院し、ぴいちゃんをショートステイに預けることになりました。母はぴいちゃんのいる施設と祖母の病院に行かなければならず、本当に大変だったと思います。でも、いつも笑顔で私たち家族のこと、仕事、介護の全てをやりこなし、疲れた態度を見せないのです。それどころか、

「今日、ぴいちゃんが食事に出たお魚をポケットに入れてソファーに座ったときに出したの。おもしろかったんだ。」

と言うのです。私はぴいちゃんの失敗や言葉の一つ一つに「またか…」と呆れたり、「何回言えば分かるの？」と悲しみや怒りを感じていたのに、母は、ぴいちゃんを温かく見守っているのです。

肉親がアルツハイマーになって自分のことを分からなくなっていく状態を母は悲しく思わないはずはないのですが、いつも笑顔でぴいちゃん、祖母を支えています。

そんな姿を見て、ぴいちゃんに優しく接しなければ…と思っていた矢先に、会えなくなってしまいました。理由は今も尚、人々を不安にさせている新型コロナウイルスが原因です。祖母は退院したのですが、無理ができない体になり、ぴいちゃんは施設でお世話になることになりました。施設の感染予防のため、母、祖母しかぴいちゃんに会えません。私は会えなくなり、何でもっと優しくしなかったのだろうと、自己嫌悪に陥ってしまいました。

そんなとき、母に

「今は会えないけれど、菜々花は自分のできることをやりなさい。」

と言われたのです。私は考えた末に、相手を思いやる気もちを持ち続けようと思いました。相手のことを一番に考え、誰に対しても優しく接することを心掛けるようにしました。生徒会の仕事では、学校の皆に喜んでもらえるように中総体や合唱コンクールに向けて、士気を高める掲示物を作ったり、苦手な友人の良いところを認められるように、見方を変えたり、日常のささいなことですが、相手のことを一番に考え、自分ができることに全力を尽くしています。

コロナ禍の今、大切な人と会えなくなっている人がたくさんいるはずです。命を守ることが最優先なので、仕方のないことですが、私はぴいちゃんにしたかったことを少しでも実践していきたいです。私が相手の心に寄り添えたとき、初めてぴいちゃんと心からの会話ができると思っています。「あんた誰や？」と言われても、笑顔で「私がひ孫の菜々花だよ。おかえり。」と迎えたい、今はそう思っています。

●プロフィール●

好きなことやもの	ピアノを弾くことが好きです。実際に弾いている人の動画を見て、自分の好きな曲を毎日弾いています。姉もピアノを弾けるので、いつか姉と一緒に演奏したいです。
苦手なことやもの	朝、自分で起きることが苦手で、母に起こしてもらってしまいます。
将来の夢	私は美容師または保育士になりたいと思っています。将来、多くの人を笑顔にしたいです。また、現在は受験生でもあるため、今ある自分の課題に向き合い志望校に合格したいです。

優　良　賞

私の好きなこと

登米市立米山中学校　２年　伊藤（いとう）　葵（あおい）

私は、小学校３年生の時からミュージカル劇団に所属しています。

私がこの劇団に入るきっかけとなったのは、４歳の時に初めてミュージカルを見たことです。多くのキャストが舞台上にいる中で、私はある一人のキャストばかり目で追っていました。堂々とした立ち姿、透き通った声、それでいて包み込むような歌声－「私もあんなふうになりたい」と強くあこがれを抱き、４年後に入団しました。

劇団では毎年秋に定期公演を行っているのですが、私が今年任された役はこれまで演じてきた役と比べても特に難しく、自信を失ってしまった時期がありました。練習でも「声が小さい」「もっと大きく動いて」と、初歩的なダメ出しを受けることが何度もありました。

どうして自分には上手く表現できないのだろうと思っていると、一緒に練習している団員の姿が目に入って来ました。あの人の声は大きくてホールに響き渡っているけれど、私の声はか細くて聞こえづらい。あの人の演技は見ていて楽しくなるけれど、私の演技は見ていてつまらない。－いつしかそんな風に自分と他人を比較するようになり、一度だけ、どうしても行くのが怖いという理由で練習を休んでしまいました。他の団員に合わせる顔がないなと思いながらも、せめて何もしないよりはと、数年前の公演のＤＶＤを見ることにしました。

テレビに映ったキャストの生き生きとした動きや声からは「楽しい」「好き」という思いが嫌と言うほど伝わってきました。そして、そのキャストたちとはかけ離れた今の自分が嫌になり、気付けばＤＶＤを停止させ、膝を抱えて泣いていました。

いつから演劇することが「楽しい」と思えなくなったのだろう、きっと今、この役を辞めてもいいと言われても私はそんなに悲しくない。そんな情けない役者になりたくて劇団に入った訳じゃないのに、と一人で考えました。－それでも、最後に残ったのは、入団したいと思った時と同じ、「私もあんなふうになりたい」という思いでした。

いつまでも下を向いたままではだめだと、次の練習には参加しましたが、急に改善できる訳もなく、「声が小さい」と同じようなダメ出しをされてしまいました。

「何度も同じことで落ち込んで悔しくないのか」
「次はもっと上手くやってやる」

頭に浮かんだのは、劇団に入るきっかけとなったキャストでした。あの人のように格好良くはなれないかもしれない、それでも、この「好き」という気持ちだけは絶対に忘れたくない。そんな思いを込めて演技しました。－その時、私は再び演技することを「楽しい」と思えたのです。

でもまだ完璧に演じられる訳ではありません。しかし、私はこれからも演技を続けていきたいと思っています。

失敗なんて気にしない。手を、足を、口を、心を、精一杯動かすこと。どれだけ拙くても、それが私の「好き」を大切にする一歩だから。

●プロフィール●

好きなことやもの	絵を描くことや物語を書くこと、本を読んだり、役になりきって演技をしたりすることが好きです。
苦手なことやもの	長距離走や夜に怖い話を聞くことが苦手です。
将来の夢	漫画家になりたいと小学生の頃からずっと思っています。自分の中の何かを表現する人になりたいです。

優　良　賞

僕の「親孝行」

大崎市立鹿島台中学校　2年　横田侑海（よこたうみ）

「はぁ…」テレビを観ていた母がため息をついた。何かあったのだろうか？隣で勉強をしていた僕は気になって顔を上げると、テレビには「親孝行」という文字が映っていた。

僕の母は、とても優しく、頑張り屋だ。毎日忙しいのに、料理も掃除も絶対に手を抜かない。そんな母と僕の仲は決して悪いものではない。しかし、少しのことでも反抗してしまうことが多く、いつも感謝はしているが、なかなか素直に気持ちを伝えられずにいる。僕は内心、（お母さんが忙しいように僕だって勉強や部活で忙しいんだよ！）と言い訳をする毎日だった。

母が観ていたのは「30歳の男性が愛する親に親孝行」というニュースだった。その男性は、５歳で親元を離れることになってしまい、別の家庭で育てられて大人になり、実の母親を探すという話だった。男性は、日本中を巡り、やっと実母と再会し、今までのこと、母への思いを伝えることができた。そこには元気に成人した我が子に会えたことでうれし涙を流す彼の母親の姿があった。僕は、そのニュースを観てハッとした。僕は、母からどんな息子と思われているのだろう？反抗的な態度ばかりで知らないうちに母を傷つけていたのではないか？いつも感謝していても心から「ありがとう」と母に伝えていない…そんな僕に母は、たくさんの心配と不安を抱えているからため息をついたのではないか？

ニュースを観終わった母に

「親孝行ってどんなことをしてもらったら嬉しいのかな？」

と聞いてみた。すると

「侑海には、何不自由なく、健康で、自分がやりたいことをしてくれれば、それがお母さんにとって親孝行だと思っているよ。」

と優しく答えてくれた。

“親孝行”…僕は今まで親孝行とは、仕事に就いて働いてお金を稼いで親を楽させること…そう思っていた。しかし親が子どもに望むことはそうじゃない。子どもの健康を第一に考えてくれていたのだ。子どもが親に何かをしてあげたいと思う心も大切だが、僕が、僕自身を大切にすること。それが母を一番安心させられることなのではないかと気付いた。「子が親を思う心」と「親が子を思う心」お互いを思い合う心があれば親も子も安心して笑顔で暮らせる鍵となるのではないか。

この作文を書き始めた時、僕は親孝行って「目に見えるもの」そう思っていた。しかし自分が何かをしてあげたいという思いは自己満足ではいけないのだ。つまり、親孝行とは「目に見えないもの」だったのだ。あのニュースの男性は、再会した実母に高価な、お金で買えるものをプレゼントしたりはしていなかった。母親は、無事に元気でいてくれた男性の姿を見て、それだけで安心したのである。これが、最高の「親孝行」なのではないか。

僕の母が願う「親孝行」の形と、ニュースの男性の姿が重なって見えた。

やりたいことをやって笑顔で元気に暮らす自分でいるためには、夢を実現することが条件だ。僕は将来、ロボットエンジニアになることが夢だ。その夢を叶えるために今、一生懸命勉強を頑張っている。社会の役に立てるようなロボットエンジニアになるためには、勉強だけでなく、自分もまわりも笑顔でいられるように、人を思いやる心を育て、自分を磨く努力も必要だと考えている。

母が願う僕の姿。僕が元気に充実した毎日を過ごす姿と笑顔を母に見せることが、僕の「親孝行」となり、人々の幸せにもつながるのなら、これからも僕はありったけの努力を続けていきたい。

●プロフィール●

好きなことやもの	想像したりイメージを広げたりしながら絵を描くことが好きです。また、自分で設計して物を作ることが得意です。生物にも興味があるので、よく外で観察をしています。
苦手なことやもの	ボールを使ったスポーツが苦手です。また、ＩＴ関係があまり得意ではありません。しかし、将来の夢を実現するために、今後はパソコンなど電子機器の操作に慣れるように取り組んでいこうと考えています。
将来の夢	ロボットエンジニアになることが夢です。社会で役立つロボットを開発し、たくさんの人を笑顔にできる人になりたいです。

優　良　賞

ふみ出す勇気を形にして

栗原市立築館中学校　3年　榎本花音（えのもとかのん）

あの日、鏡に映った私の顔は不安と緊張で今にも泣き出しそうでした。その表情から私の気持ちを察したのか、美容師さんは「世の中には、髪の毛が必要な人はたくさんいる。きっと誰かの力になるよ。」
その言葉に背中を押されて、私はやっと決心しました。

癖もなく艶があり、腰のあたりまで伸ばしていた私の髪。母にいつも様々なヘアアレンジをしてもらうのがうれしくて、学校では「いいなぁ、その髪の毛、さらさらで。」
と、いつも友達からほめてもらうことが多かった自慢の髪でした。小さい頃から長い髪に慣れていたので、自分の髪に、はさみを入れることが想像できませんでした。

小学校６年になった頃、母から突然、「ヘアードネーションやってみたら？」
と、言われたのです。
「ヘアードネーションって何？」
初めて聞く言葉。私はすぐにインターネットで調べました。その意味は「小児がんや先天性の脱毛症、事故などで髪の毛を失った18歳未満の子どもにウィッグとして自分の髪の毛を提供する。長さは31センチ以上が必要。またウィッグ一つ作るのに30人から50人分の髪の毛がほしい。」という内容でした。

「私の髪の毛が誰かの力になるならうれしい！」
と、初めはすぐにそう思いました。

しかし時間が経つにつれて「今までずっと伸ばしていたのにそんなに切るなんて…。友達がほめてくれた自慢の髪の毛…。短い髪型が似合わないと笑われたら…。切りたくないどうしよう。」

髪を切ることで、自分の存在を捨ててしまうような、そんな重苦しい気持ちで、母の提案をすぐに受け入れることができませんでした。

しかし、ヘアードネーションのことはずっと気になり、ネットの検索も自然とそれに関連することが多くなりました。そんな時、ある動画の場面で、
【病気で髪の毛を失い、ショックを受けた女性が、ウィッグを付けて色々なヘアアレンジをしておしゃれを楽しむ姿でした。】

女性の顔は、とてもうれしそうで、輝いて見えたのです。
「私が自分の髪の毛で笑顔になり自信を持てたように、自分の髪が辛くて苦しんでいる人を笑顔にし、幸せにできたら嬉しい。」
と、強く思うようになりました。そのきっかけを私が作ると思うと、私が髪を切る悩みなんて本当に小さなことだと思えるようになりました。

その後、伸ばし続けた髪を中２の冬に30センチ以上切りました。翌日登校したとき、先生や友達から切った理由を聞かれ、ヘアードネーションを初めて知ったという人も多くいて、「すごいね！」とたくさんほめられました。

後日、髪の毛を寄付した団体のホームページに「あなたの優しさが子どもたちを笑顔にしてくれました。」のメッセージとともに自分の名前を見つけ、とても胸が熱くなりました。このとき初めて自分の力が、誰かを幸せにするための手助けになったことを強く実感し、うれしかったです。また自分が勇気を持って踏み出したことが誰かを幸せにすることに気づきました。

今のコロナ禍で不安な時代、自分の時間や体力を削って働いている医療従事者の方々のことが連日報道されています。そのようなことを知れば知るほど、自分も何かをしなければ、誰かを幸せにすることはできないかと探し始めました。私達中学生にもきっとあるはずです。みなさんも誰かの幸せのための勇気ある一歩を踏み出してみませんか。

また私は、髪を伸ばし始めています。見えない誰かの幸せのために。

●プロフィール●

好きなことやもの	ピアノやトロンボーンを演奏すること。
苦手なことやもの	人前に出て話すこと。
将来の夢	周りの人から頼ってもらえるようなかっこいい人。